

# 信太 NOW

SHINDAI NOW is the communication bridge between YOU and the University.

No. **61**



## 特集 座談会 信州大学登山隊 ヒマラヤに行く②

信州大学創立60周年記念事業 信州大学学生山岳会・山岳会

- ◎地域コミュニケーションパラダイス
- ①「天空の里」=飯田市上村下栗の明日にかける  
伝統的作物「下栗芋」による活性化を中心にして
- ②ハナサカ軍手プロジェクト「まち」のにぎわいを創りたい。  
上田のことを、「軍手」のことで知ってほしい。

### 「山岳写真の魅力」

「この山はどう撮って欲しいのかな…」山と対峙した時にいつも考える。凛々しい山、猛々しい山、優雅な山、山にはそれぞれの個性があり、自然の現象がそこに表情を与える。大地に力満ちる朝焼け夕焼けのドラマ、雲を纏った劇的な姿、太陽の指す角度だけでも表情は変わり、一日同じ場所から眺めていても飽きることはない。

自然は美しいもので、中でも「山岳」は最も変化に富み、最も劇的な自然の顔だと思う。その山をその山らしく撮る…山の個性と最もいい表情を撮り人々に山を見せていくのが僕の使命であり、その中で作家としての表現をしていく、僕にとって「山岳写真」とはそういうものである。

今回の遠征では登頂を目指すと同時に、世界最大のヒマラヤの山々とういう会話が出来るか、どんな姿を見せてくれるのか、楽しみだった。期待通り、山は様々な表情を見せてくれ、夢中になってシャッターを切ることが出来た。今、フィルムを見返すと何百もの山の表情がそこにある。フィルムに切り取ることで、山の「感動」を永遠に留めることが出来る、山岳写真の最大の魅力ではないだろうか。

(大木信介 隊長)



上：朝日に照らされるわずかな時間に撮影した。左ヒムレンヒマール、右ヒムジュン。  
右：キャラバン中、仲良くになった村人と。



### 表紙の写真

ネムジュンに向けて氷河をアプローチ中、後ろにあるのは氷河と氷河湖。二人とも喉の保護と日焼け止め兼用マスクをしている。荷物はネムジュンアタック装備で5日分以上の食料装備で25kg以上を担いだ。



### キャンパスだより



もうすぐ、後期試験が始まります。共通教育の試験日程が張り出され、じっと見つめている学生がいました。ガンバって！！

■昨年12月から信州大学で働くことになりました。主にウェブサイトの管理を担当していますが、日々勉強の毎日です。モチベーションの高い方々に囲まれ、成長していく自分を感じられることが幸せです。先日、ウェブに載せるキャンパス風景の写真を撮りに構内を1時間ほど歩きましたが、数百種

類の木や花が植えてあり、まるでどこか森の中のような感覚でした。新しい発見の連続です。こうした木々との出会いもそうですが、縁あって、尊敬できる方々に出会い、毎日、毎日素敵な時間を過ごしています。(広報室：倉澤)

■大学に入学し、今までに多くの経験をした。長野に来て標準語や地域の方言をはじめ大量に聞いた。暇な時間を利用して読書に没頭した。留学生と様々なことを話し、生まれ育った文化の違いや異なる考え方を知った。長期休暇(夏休み)を利用して東南アジアを旅した。●●をさぼって友達と食堂で昼ごはんを食べた。一晩中友達と話をした次の日の▲▲をすっぽかした。バイトでためたお金で好きなものを買った。テスト前日、徹夜で全期記した。その全てがどれも良い思い出になると思う。だから、春から新しくなるキャンパスでも楽しんで、こんな思い出を作っていきたい。

(繊維学部1年：吉田)

高気密高断熱と設計の自由度の高さを生かし、お客様に「世界にひとつだけの住まい」を考えています。



お気軽にご来場下さい。



GL HOME トステムグループ

**ジ-エルホーム松本店・諏訪店**

松本店：松本市市場9-7 ☎0120-853-958 諏訪店：諏訪市津田町5-7 ☎0120-007-958

URL <http://www.withk2.co.jp> Mail [info@withk2.co.jp](mailto:info@withk2.co.jp)

01 ●特集 座談会  
信州大学登山隊、ヒマラヤに行く②

信州大学創立60周年記念事業 信州大学学士山岳会・山岳会

07 ●センパイの肖像 近藤幸夫さん

- 09 ●地域コミュニケーションパラダイス
- ①「天空の里」=飯田市上村下葉の明日にかける 伝統的作物「下葉芋」による活性化を中心にして
  - ②ハナサカ軍手プロジェクト 「まち」のにぎわいを創りたい。上田のことを、「軍手」のことを知ってほしい。
  - ③展覧会をつくろう。 装いと「私」、装いとまち(松本) 人文学部芸術コミュニケーション講座 「Costume in play」

14 ●「今ドキ」の留学事情 第1話 韓国 嶺南大学校:上杉真由さん

15 ●研究室紹介(第70話) 持続的社会的構築をめざして 科学技術で挑む地球温暖化対策 繊維学部 准教授 化学・材料系材料化学工学課程 高橋伸英

16 ●Special Report 大学院における新しい教師教育の挑戦 専門分野を超えて協働する「授業研究アリーナ」

17 ●「新聞を読もう!」第2回 新聞は「奥」が深い。

19 INFORMATION & COMMUNICATION ●お知らせ・おたより

22 「キャリア」歩き方のヒント 編集後記ほか



特集

# 信州大学登山隊、ヒマラヤに行く②

信州大学創立60周年記念事業 信州大学学士山岳会・山岳会

昨年秋、信州大学登山隊の第一～第四チーム63名が、ヒマラヤの登山とトレッキングに挑んだ。最後まで現地に残っていた第一チームは、ネムジュン西壁の初登攀を成功させて11月14日に帰国し、すべての山行が無事終了した。

前号に引き続き第二弾は、大木信介隊員(第一チーム:山岳写真家)の写真と、座談会をお届けする。第一チームの山行報告を中心に創立60周年の記念事業について、また、ネパールのこと、山の魅力について語った。



- 第一チーム(8名・9月6日～11月14日) ヒムルン・ヒマール登攀、ネムジュン西壁初登攀
- 第二チーム(5名・9月22日～10月27日) ヒサンピーク登攀
- 第三チーム(19名・9月24日～10月19日) アンナプルナ街道一周トレッキング
- 第四チーム(31名・10月11日～10月19日) 故小川藤氏の追悼式を挙げる

ヒマラヤは、サンスクリット語で「雪の住処」という意味を表す。地上で最も天に近い雪の世界。



信大NOW 第61号  
制作:信州大学広報室  
◎表紙:ネムジュンへ向かう。中央に写っているのは田辺道雄隊長。後ろに真谷道弘隊員。  
●写真撮影は21ページ  
撮影:大木信介

# I Love the Mountains!

信州大学創立60周年記念事業 信州大学学士山岳会・山岳会  
2009.9.6.~11.14.



特集 信州大学登山隊、ヒマラヤに行く②



岩肌がまだらに見えるその頂は第二チームが登頂したピサピーク。左奥の白き峰はアンナプルナI峰。1971年同様に登頂した信大生の佐藤正樹さんが居る。第二、第三チームはサラタン・コーラのBC跡で佐藤さんを追跡した。



遠征式 撮影:大島いよ子隊員(第三チーム)

## 参加した全員が 主役になる登山隊を実現

司会 初めに、なぜヒマラヤを、またこの山域(エリア)を選んだのですか?

宮崎 1967年に小川勝(故)さんを含む現役の4名がガネッシュやアンナプルナ山群をトレッキングして、信大が登るにふさわしい山を選んだのが海外遠征の始まりでした。

信州大学は、国公立の新制大学ではいち早く海外遠征に取り組んだんです。小川さん達の調査をもとに20周年記念事業を行い、その後、ほぼ10年ごとにヒマラヤで周年事業が実施されてきました。

松尾 アンナプルナ山群は過去に遠征も出ていて、我々に馴染み深いところ。しばらく遠征がなく、2006

年田辺さんの遠征提案にみんなで盛り上がりました。その頃に生きていた小川さんの遺志を活かしたいという思いもありました。

田辺 アンナプルナI峰の北東、ペリヒマール山域はこぢんまりと7000m級の山が固まっている山群で我々の力量で踏しすぎず、縦走やいろいろなスタイルが楽しめ、現役のトレーニングにも相応しく、何千万円をかけて8000mにトライするよりも信大らしいと思いました。

花谷 ぼくはエリアよりも、スタイル。どんな登り方をするのかが大変だと思っています。世代もやれることも違う人達と一緒にすることで、全員が主役になることを目指した。第一から第四チームのスタイルができたのは意義があったと思います。



江川 信



宮崎 敏孝

## “山の信大”の危機に OBたちの奮闘

司会 江川さんは遠征の話聞いてどんなふう思ったのですか?

江川 初めに誘われたのは、1年の5月に行った徳本幹(上高地。OBと現役が参加する山行)でした。現役部員は4年生と僕だけ。冬山の経験もない僕に「なっ、何を言っているんだ?」という気持ちでした。

司会 参加が決まった後のトレーニングはどうでしたか?

江川 江川を鍛えるということで田辺さんや花谷さん、大木さんを中心に指導してもらいました。山岳会としても、ものすごい支援してもらったと思います。

松尾 とにかく痛烈に感じたのは山岳会の危機。ぼくは江川君に何度も「やめるなよ」って言いました。(笑)自分自身、アンナプルナに行った(71年)ときの思いが今もずっと持続しているので、江川君にもそういうものをもってもらいたかったです。

## ■座談会メンバー

- 宮崎 敏孝 (学士山岳会会長・農学部特任教授)
- 松尾 武久 (学士山岳会60周年記念事業実行委員長)
- 田辺 治 (第一チーム隊長・山岳ガイド)
- 花谷 泰広 (第一チーム隊長・山岳ガイド)
- 江川 信 (第一チーム隊長・理学部2年)

司会 岡本 誠 (信大OB・株式会社クイックス会長)

\*山岳会の記念事業誌をまとめるなどで山岳会と関わってきた座談会のメンバーの写真:公文健太郎



水河をゆく

ハイキャンプ C2

ネムジュン登攀

10月27日 ベースキャンプを出発 (C1 第一キャンプに泊まる)

28日 登攀の準備 (ABCアタック・ベースキャンプ)

29日 登攀 (C2 第二キャンプに泊まる)

30日 ヒマラヤをトラバースして頂上へ 登攀が難しくC2に泊まる

31日 登攀を下り、12キロの道のりを歩いて帰還

ベースキャンプに戻ってきた4人



満月とヒムルン



ベースキャンプにやってきたヤク



**大木信介隊員**  
第一チーム、写真家。02年人文学部卒。卒業後すぐに、写真家の白根史朗氏に師事。ヨーロッパアルプスを中心に登山経験が豊富で、後輩たちへの指導も熱心に行っている。(P.21に大木さんの一言を掲載)

### 底力でやり遂げた ネムジュン登攀

**司会** 第一チームの苦労話を聞かせてください。

**田辺** 今年の秋はヒマラヤ全般に天気が悪く、ベースキャンプでは3日間雪が降り続けました。ヒムルンのC1(第一キャンプ)が雪に埋もれて2メートルぐらい下から掘り出したり、ネムジュンでは

風がひどくて、衛星電話で予報士に確認しながら風が止むのを待ちました。登ったのは日程終了や/や。待って、待ってモチベーションを切らさないでいることが大変でした。



田辺 治(たなべおさむ)隊長

1961年名古屋生まれ。農学部卒業。ヒマラヤの登山家として世界トップレベルの実績を持つ。今回のヒマラヤは25回目で、エベレスト南西壁を季節初登攀(1993)、ロープウェイ南壁を季節初登攀(2006)など、冬季の8000m峰登山は、高、低、高、低、高、低、高、低の8回とされている。中でも標高3300mのロープウェイ南壁の登攀は格別で、世界初8000m峰14座を全山登攀したというウサイン・ボルト・メスナーは「ヒマラヤの21世紀の課題」と表現した。田辺さんは3度目の挑戦でついに登り切った。「2度も登り返されたのですが、凍傷も骨折もなく、女神は最後に我々に優しくしてくれたと思いました。そうであれば生きては帰れないはずのところでした。」「人を死なせない隊長」という紹介フレーズがある。

**花谷** 待つ時間は非常に長く、その間集中力を切らさずにいるというのは大変なことでした。毎日同じ景色、同じメンバーです。健康体でいて、三食昼寝つきが一週間続くときさすがにいやになりますね。

**司会** ヒムルンヒマールで江川さんはどうでしたか?

**江川** ぼくはC1へ行くまで、高度順応がうまくいかなくてダメダメでした。大雪が降った

おかげで逆に長い間ベースにいられたから、なんとか登れたと思います。本当なら一番動かなければいけない立場なんですけれど、全然動けなくて。

**田辺** 順応してからは役立ちましたよ。私と大木のベースにぴったりついて来たし、最後は30キロ以上を担いでもらいましたから。江川 最後だけなんかですね。

**松尾** ネムジュンは1000mの壁からその上を全部花谷さんがリードしてくれていましたね。

**花谷** ネムジュンの壁そのものは難しいものではなく、全体を通して(しんどい)物語がありました。ベースキャンプから標高差1200mを2日間で12キロぐらい歩き、1000mの壁を登って、そこから山頂へ行くまでのヒマラヤをトラバース(横切って進む)していくところが

いやな感じでしたね。疲労した4日目に気を遣う長いトラバースでしたから。例えば日本で技術力のある人達がヘリコプターで来てさっさと登ればもっといいパフォーマンスをするでしょうが、地味に歩いて取り組むことが大学の山岳会であり、信大らしさだったのかなと思うんですよ。

**松尾** 取り付きまで12キロを歩いていくということは、ものすごく体力のいることだと思います。第一段階のこれは苦痛でしたよね。

**司会** 壁を登るのにどのくらい時間がかかったんですか?

**花谷** だいたいのはり始めてから14時間ぐらいですね。抜けたら夜8時ぐらいでしたから。

**司会** 簡単にいいますが、その間は休む事もできないんですね。

**田辺** まあ、行動食を口にするぐらいで、ずっと立ったままですね。世界では、もっと難しい壁もありますが、まあ、我々の力量としては相応しかったと思います。

### ポーターは携帯電話、 村には電灯が。

**司会** ところでネパールやキャラバン(山までの往復)はどんな様子でしたか

**田辺** ネパールでは政権交代後に、ポーター代が2倍ぐらいにあがってしまって、ロバを使いました。ポーターだけでしたら、大変な費用になったと思います。

**花谷** ぼくは8年ぶりのネパールでしたが、以前は裸足で歩いていた人をよくみかけましたが、今はサンダルや靴をはいているし、ポーターは、携帯電話を持っていますね。ベースキャンプのふもとにあるプーガオンという村でも太陽光発電が置かれて、夜には電気がついて…びっくりしました。

**松尾** ハナタレ小僧もいなくなっていましたね。



松尾 武久

### 「未知への挑戦の機会を！」 故小川さんの思いが 山岳会を支えた

**司会** 今回の記念事業に大きく関わっていて、第四チームで遺悼が行われた小川さんはどういう方だったのですか?

**宮崎** 現役や若いOBが海外へ行くことによって、自分の物差しを広げる。小川さんは、その経験をつなげていくことが、信州大学山岳会の一歩の土台だと強く考えていたと思います。1967年にヒマラヤへ偵察に行った小川さんは、それまで持っていた自分の中のものがガラリと変わるような経験をしてきたんですね。60周年へも参加するつもりだったと思いますが、急逝してしまいました。その時に持っていた手帳に学士山岳会へ遺産の一部を寄付する

という記述があったんです。私達は小川さんの思いを生かそうということになり、今回の主に第一チームと衛星通信回線などの費用に充てさせていただきました。彼は、かねがね「信州大学山岳会の生活が僕の人生のベースを作った。ぼくは山岳会に育てられた」ということをいろんな人に話していたんです。

**松尾** 小川さんは山岳会に入ってきたころは弱くて、僕の後でしょっちゅうへばっていました。でも、いいやつだった。僕は彼の後輩に対しての援助のことをよく知らなくて、彼は、いつの間にか大きな存在になったんだなあと思いました。今回の事業は出来る限り、あいつの思いに沿うように計画したんだけど、あいつがいたら、もう少し変わったかもしれないですね。

**花谷** ぼくらは、小川さんに登らせてもらいました。



花谷 泰広

### 山で出会う、美しさ、冒険、 困難 そして、仲間

**司会** 小川さんを育てた山と山岳会、山の良さ、魅力とはどんなものでしょうか。一度会社勤めをしてから、本格的に山の世界に飛び込んだ田辺さんの場合はいかがですか?

#### ■山岳科学総合研究所との共同研究と調査を実施

①山岳環境科学部門(担当:山岳科学総合研究所長・理学部教授 鈴木啓助) ペリヒマール、マンヒマール、アンナプルナヒマール山域の深流水、雪、氷を採取して持ち帰り、分析。水質特性や水の循環機構について検討、解析する。  
②高地医学・スポーツ科学部門(担当:医学部教授能勢博・同教育特任教授 源野広和) 運動量計測器「熱大メイト」を装着行動し、データを取得。5000m以上での高齢者の運動機能、循環器機能について解明する。

◎前号で「北西壁の初登攀」としたのは誤りで、正しくは「西壁」でした。訂正し、お詫び申し上げます。

**田辺** 魅力はいろんな出会いがあることですね。学生時代の82年のガネッシュ遠征のあと、卒業して87年に日本ヒマラヤ協会でラブチュカンに行きました。これが面白かったんです。ラブチュカンは未踏峰で、国際編成のチーム。山行途中で巨大な氷河湖で氷が落ちて大津波が起き、デボしていた登山靴が流されてしまいました。チベットの人民解放軍あがりて参加して

いた隊員の長靴を借り、アイゼンをくり付けて脱げそうなのをなんとかこらえて登りました。いろいろなトラブルがありました。それをみんなで乗り越えていったこと、こんなに面白いものは日本にはない、これをずっと続けていきたいと思ったんですね。僕にとっては自己表現、自己実現ができるところがヒマラヤです。

**司会** すごい、魅力的な冒険ですね。しかしそこには、常に「危険」が付きますよね。

**花谷** 危険ということばと、もう一つ似たようなことばで、困難ということばがあります。ぼくらは危険なことをするために山へ行っているわけではなくて、自分で解決できる困難なことを目指して、山に行くんです。たとえば天気が荒れたら、その中で動くのは危険なことですが、晴れたところで難しいとこ

ろを登るのは危険というよりも困難なんです。その困難を越える楽しさも登山の醍醐味の一つです。なかなか普通のクラブ活動では味わえないと思います。

**田辺** 登山の中で危険との間合いの取り方や、引き際を感じ取ることが身につけてきたと思います。これまで生き延びてきたから。危険の程度を感じとれると、工夫してリスクを最小にできるようになります。

バーチャルな世界では決してわかりません。

ヒマラヤは不可抗力の、予測不可能なことがいつでも起きる可能性があります。国内であれば、危険を避ける方法はかなり確立しています。それらのことをすっ飛ばしてやらない限り、そんなに危険を恐れることはないでし



司会 岡本 誠哉

よう。何もせずに、生きていくよりも、やり遂げた喜びを味わって欲しい。そういうものをみつけられたらいいんじゃないかと思います。  
**松尾** いや〜、山っていいんですよ。すばらしいことがいっぱいある。仲間も、自然も。それを無視して危険なことばかり考えていてもしょうがない。信州大学に入ったら周りはみんな山ばっかりなんだから、まず足を踏み入れて欲しいって思いますよ。(了)



プーガオン